

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2021年5月 NO.221



【もくじ】

- 2～3 第31回高知出版学術賞を審査して…青木晴男
- 4～5 台湾桃園日記(完)―〈コロナ〉によせて…吉尾 寛
- 6～7 視覚障害二十年に思う…吉岡邦廣
- 8～9 『SASUKE』に挑戦し続けて…森本裕介
- 10 和太鼓と私…日ノ Hayato
- 11 「アンテナ」NHKのど自慢への挑戦…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「鯉昇る」吉良 遥菜

公益財団法人高知市文化振興事業団

高知出版学術賞を審査して

青木 晴男

本年は十八点の応募作品があったが、うち二点は、「高知出版学術賞要綱」に照らし審査対象外であったため、残る十六点について審査を行った。第一次審査を通過した八点を委員間で精読し合い、第二次審査でさらに委員間で討議を尽くした結果、委員会の総意として次の三点を受賞作品（本賞二点、特別賞一点）に選んだ。ただし、第一次審査を通過した八点のうち二点は、執筆者の中に本審査委員会の委員が含まれていたため、「要綱」に従い、当該委員を除いた審査委員間で精読し合い討議した。

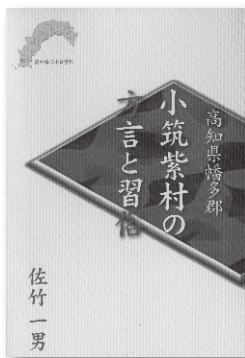
■本賞

佐竹 一男 著

高知県幡多郡

小筑紫村の方言と習俗

『小筑紫村の方言と習俗』を刊行する会 刊（四六判、二二五頁）



高知県幡多郡 小筑紫村の方言と習俗

佐竹 一男

四十年前程前に他界した佐竹一男氏の遺稿「小筑紫村の方言と習俗

の手書き原稿（原稿綴り二冊）」「幡多方言に関する手書き原稿（ノート一冊）」等を、氏の次男眞文氏より送り届けられた方言研究者が、その価値を認めて「『小筑紫村の方言と習俗』を刊行する会」を立ち上げ、代表となつて約一年八カ月をかけて原稿を活字化して刊行したもの。

本書の主な構成は、「父、佐竹一男」「佐竹一男年譜」「本書の読み方（凡例）」「語彙の採集」「部類別語彙」「方言抄」から成る。

本書の中心的位置にある「部類別語彙」は、採集語彙を民俗語彙として計二十二部類に分けて五十音順に再配列し各語に語義及び関連する習俗を記したもので、「農事」「漁村」「山」「年中行事」等の部類を中心に、他の部類の見出

し語とその習俗的説明を読み進めていくと、読者の心には自然に当時の小筑紫村の人々の生業（農・林・水産業など）や生活世界が立ち現れて来る。本書は、第一次産業の衰退で地方の暮らし・文化の存続が危ぶまれている今日、約八十年前の小筑紫村の人々の生活・文化について教えてくれる貴重な資料である。

「方言抄」で五十音順に並べた約百古語について、古典文学からの用例を多数引用して各古語の語義と使い方を説明しているが、説明は力行中段で途絶える。著者の原稿執筆時の昭和十年代は戦線が拡大し日本が太平洋戦争へ突入して行つた時期で、著者自身も応召したため。状況が違つていたならばさらに多くの古語が説明されたらうと惜しまれる。

もう一点追記すると、本書の多くの見出し語には三種の赤い傍線が付されている。本書が併読を勧めている斎藤香織の高知大学卒業論文（二〇二〇）（ネット上で公開中）によれば、それはアクセント記号である。赤い傍線は、当時の小筑紫村の人々が各見出し語をどう発音したかを示唆する点で、音声的資料価値がある。

以上、昭和十年代の幡多地域・小筑紫村（現高知県最西端の小筑紫町）の方言、習俗、アクセント記号を記録した本書は、方言及び

民俗の資料的価値に加え、音声的資料価値も有するという点で、将来の市民の財産となる後世に残すべき希少で貴重な書である。

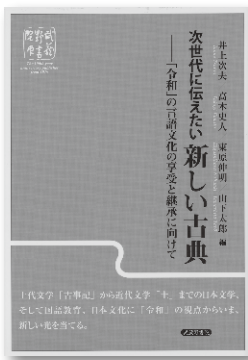
■本賞

井上次夫・高木史人・東原伸明・山下太郎 編

次世代に伝えたい新しい古典

『令和』の言語文化の享受と継承に向けて

武蔵野書院 刊（A5判、二七二頁）



次世代に伝えたい新しい古典『令和』の言語文化の享受と継承に向けて

「次世代に伝えたい新しい新しい古典」を共通のキーワードに、上代から近代までの（古典漢文を含む）古典文学作品、国語教育そして日本文化について、若手からベテランまでの計十八人の専門研究者が、新しい視点・読み方・指導法等を示して次世代に古典を読み継いでもらおうと執筆した計二十四編の論文集。

本書の構成は、Ⅰ章 古典文学（上代・中古・中世・近世・近代）・古典漢文、Ⅱ章 国語教育（小学校、中学校、高等学校）、Ⅲ章 日本文化（民衆・政治・社会）から成る。Ⅰ章では上代の『古事記』から近代の『土』まで、有名な日本古典作品について多様な現代的視点から新たな光が当てられ、古典漢文に関する論考を含め、十七編の論考が収まる。Ⅱ章では学校教育における古典の位置づけ、古典の主體的・対話的学びを促す指導法等に関する四編の論考が、Ⅲ章では日本社会に根付く文化を理解するため、『今昔物語集』、『民権自由論』、『昔語りを「聴く」姿勢』について新たな視点で考察する三編の論考が、収まる。

各執筆者たちは現代的視点に立ち、「古典世界を現在のわが身に引き寄せて理解し表現」しながら、新たな読み方や教育上の課題などを提起している。若干の例を挙げると、(1)土左日記は特権層の姿を描くことで「物言わぬ」大衆の生きる姿を浮かび上がらせる。(2)「虫めづる姫君」の「愛づる」とは、「よく本質を理解し、…その奥に、共にある」という感覚が伴っている「愛」。(3)処世訓を綴った随筆家の兼好像から、傷つきやすく柔らかな心で人生の危機を体験した兼好像との見方へ。(4)芥川が評価した『今昔物語集』の下衆の「野生の美しさ」

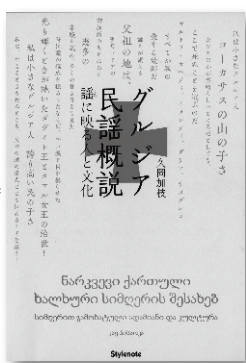
など。

こうした視点・読み方を提示されると、今まで古典から遠ざかってきた読者にも、古典の世界に入ってゆきやすい。また、取り上げられた作品は、詩歌の割合がやや少ないが、各論考はほぼ約十頁以内にまとめられ、論旨も理解しやすい点が良い。

以上から、本書は、国語教育に関わる教員をはじめ、古典や言語文化に関心ある市民、古典が過去の遠い世界に見えていた読者にも、(再度)古典の世界を覗いてみたいという気持ちにさせてくれる点で、専門性と共に教養的価値を有していると評価することができ。

特別賞

久岡 加枝 著
グルジア民謡概説
 謡に映る人と文化
 スタイルノート 刊(A5判、三〇頁)



グルジア民謡概説 謡に映る人と文化

グルジア民謡の古いレコードを聞き、コーカサスの音楽文化に強い印象を受けた著者が、トビリシ大学のグルジア語を習い、コーカサス各地を訪ね歩き、グルジアの合唱形式の民謡をはじめとしたコーカサス地方の歌舞音楽を収集・紹介したもの。

「はじめに」でグルジア民謡の様々なジャンル、国土、産業、言語、宗教、歴史などが説明された後、本書の構成と内容は次のようになっている。

第一章…各地方の民謡紹介―多様性と共通性(グルジアの首都トリビシと西部の都市グリアを含む約十五地域の独自の民謡を紹介後、合唱と楽器は地域を越えた共通性があると説明)

第二章…民謡の歌詞とそのテーマ―宗教・歴史・文化など(グルジア各地に伝わる民謡の歌詞を九項目に分類し、すべて日本語訳している)

第三章…代表的な民謡歌手と演奏グループ―録音案内つき(各地域から国民的民謡歌手二十三人と、国際的に活躍している十七の演奏グループが紹介され、グルジア・北コーカサスの民族音楽を収録した五十余のCDも紹介)

付録として、各地域からの歌いや、すい十六の楽譜、楽器や歌の種類を説明した用語集が付く。

以上の他に、本書にはアクセス

すればグルジアの各地域の様々な民謡(各種の歌・合唱・楽器演奏)を実際に聞くことができる「サンプル音源」URLも掲載され、また、計十三のコラム記事を通じてグルジア民謡以外のグルジア及びコーカサスの文化全般を深掘りできる。従って、本書は、グルジア民謡に初心者の方でも、自分の興味に応じてどこからでも読み、音が聞けるように構成されており、この地域と音楽文化にいったん興味を覚えた人を飽きさせない情報を満載している。この方面を深く研究したいと思う人にとっては重要な基礎資料となるだろう。

あおき はるお

一九四九年 埼玉県秩父郡皆野町生まれ。

高知県立大学名誉教授。第31回高知出版学術賞審査委員長。専門は現代イギリス文学。共著に『英米文学を読み継ぐ』(開文社)、共訳に『D. H. ロレンス全詩集【完全版】』(彩流社)など。

台湾桃園日記（完）

―へコロナくによせて

吉尾 寛

きて、「これ、私の手製です」と三枚ものマスクカバーを届けてくれた。本当にありがたかった。（この時、周りの方から頂いたマスクやマスクカバーは勿体なくとても使えず、結局今も〈宝物〉になっている。）

実際、台湾ではマスク着用は法的根拠（伝染病防治法等）をもとに厳しく義務づけられていた。大学では校門にテントが設けられ、警備員がバイク・車を止めてドライパー一人一人の体温を測り、マスクの着用・所持を確認した。無の場合には構内に入ることはできない。公共交通機関もマスクを着用しないと乗車できない。普段は自分本位のスタイルで運転している路線バスの運転手も、ひとたびマスクを着用していない者が乗ろうとすると断固乗車を拒否する。こんなニュースもあった。台北の地下鉄にマスクを着けず乗ろうとした女性がホームに降ろされ、その人が大柄な警備員に見事なパンチを食らわされる。



台湾製マスク

二〇二〇年二月末やや長い春節休暇を終え、私は桃園の大学に戻った。当初二月上旬に戻る予定であったが、〈コロナ〉―当時台湾では専ら「武漢肺炎」と呼ばれた―の影響を測って準備に時間をかけることにした。思えばよく日本を出国できた。元々は高松空港から出発する予定であったが、二週間前にフライトがキャンセルされ、出発数日前にやっと関空便に決まった。帰国の際もJALやANAは久しくフライトがなくヤモキさせた。在留カードの期限ぎりぎりまで台湾に滞在しようとしていた私は、ビザを延長するしないで職場の方に本当にご心配をおかけした。

桃園国際空港に着くと入国検査を受ける前に、防疫服を着た空港職員が通路で待ち構えて検温、終わると入国前十四日間の健康状態・携帯電話番号・渡航歴等をカード（防範新型コロナウイルス入境健康声明卡）に記載させた。周りはあつという間に同じ手続きをする人で一杯になった。今朝発ったガラソンとした関西空港と何という違いだろう。

空港の防疫職員からは最後に、向こう二週間の自宅待機（居家隔离）の仕方を書いた小さな紙を手渡された。「自宅」は宿舎の場合どうなるんだろうか。不安は宿舎に着くと直ぐに消えた。フロントの方から「部屋からはあまり出てはほしくないが、お湯を取りに廊下

を歩いたり、階段の上り下り、ゴミを捨てに敷地内に出るくらいはいい。食事はフロントで注文できます」と言われた。宿舎には様々な外国人が生活しており、係の方は手の消毒など細かく神経を払っていた。自宅待機の間にLINEで学生から「大丈夫ですか？」と連絡を貰い、別の学生からは母親手作りのスूपを頂いた。「桃園に戻ってきた」と思った。

三月から四月にかけて、大学の同僚から「マスク（口罩）は不足してないか」と度々尋ねられた。当時日本のマスク不足は台湾でも有名になっていた。そんな中、以前高知大学に留学し自分が担当した本校の卒業生が研究室を訪ねて

の民間閣僚であり、彼と並んで記者会見の席に座る人も医学の専門

家である。彼らは常に感染者に関
して、海外から入国した者の感染
者数、国内での感染者数（社区感
染）に分けて発表し、個別案件（例
えば中国から数回に分けられて帰
国した「台商（台湾人の企業家）」
に関する状況等々）もほぼ毎回回
表を使って具体的に説明した。こ
うした報告は人の動向を個々に把
握する仕掛け無くしては不可能だ
ろうと私は思った。ネット上にマ
スク供給地図を作ったことで日本
でも知られるようになった民間閣

「I・タン」氏の「台湾には以前から地震警報用位置情報システムがあつた」という言葉も思い出された。「民主」と「いのち」の関係は多様に有り得ると感じた。

[illegible]

ただ、台湾の防疫広報が情報技術の高さばかりを表すものだったかというところまでではない。「防疫大作戦」と銘打った政府系の広報がある。テレビを通して人が人に語りかけ、説明する広報である最初は「阿中さん」やセンターの指導部が出演し、日本でいう「三密」の注意などを喚起した。しかし具体的な対処方法（万一感染と分かった場合の自宅における待機方法等々）を広報する段になると「センター」の若い男・女のスタッフ（医師、看護師、職員）が登場し、中国語だけでなく台湾語、客家語、バジョンも加わり、五月に入ると先住民の言葉を用いた先住民対象の広報も放映されるようになった。一分そこそこのこの番組を何度見たことか。先進の情報技術と、メディアを通じた人びとへの直接的な働きかけ——この組み合わせとバランスの良さが実に台湾的と私には思えるのである。

その中で紹介された「手洗い（七字）数え歌（七字口訣）」について最後に記しておこう。私の記憶に深く刻まれた（台湾）の一片である。手に石けんやアルコールを付けた後、「内」（手のひらを洗う）、「外」（手の甲を洗う）、「夾」（指の間、

人差し指・小指各外側を洗う）、
「弓」片方の手のひらに拳を作っ
て指の外側を擦りつけて洗う）、
「大」片方の手で親指を握って擦
って洗う）、「立」五本の爪を片方
の手のひらの上で立て擦って洗う
「腕」片方の手で手首を握って擦
って洗う。ワンの発音は「完」に
通じ、終わりとなる。

皆さんもお試しになつては如何
でしょうか。

よしお ひろし
一九五三年 安芸郡安田町生まれ。
高知大学名誉教授



視覚障害二十年に思う

吉岡 邦廣

まいった。書くことがない。昨年、年末に中央公民館の講座「高知市民の大学」でお話しさせてもらって、そのまま『文化高知』の原稿も引き受けることになってしまった。昔、本誌に寄稿していたのだが、それが今の担当の方の目に留まってしまったらしい。それで何かネタがないかとオーテピアのバックナンバで当時の原稿を読んてみたりもした。二〇〇一年十一月号なので、だいたい二十年が経ったわけだ。ちょうど失明して障害者手帳をもらって、高知大学に復学したあたりだ。二十年が経ち、頭と体はすっかり衰え始めている。勝手に「よいしょ」と声が出るし、デスクを離れば何のために席を

立ったかわからなくなることもある。しかし視覚障害者としては成人式を迎えたところだ。いい意味でも悪い意味でも一人前の視覚障害者になってきたなあと思う。で、冒頭に戻って何を書くかであるが、この二十年間私の中心にあったのは「犬」、「点字図書館」、「仕事」であった。「あなたは何かからできていますか」と尋ねられたらこの三つを答えるだろうし、今の私にはこの三つしかないようにも思える（ちょっと寂しい）。なので、この三つについていつも密かに思っていることを書いていこうと思う。

ハルク、エルマー、そしてガス。三頭の盲導犬たちが私と一緒に

に生きてくれた。犬たちのおかげで「踏み外し」や「ぶつかり」は記憶の限り一度もない。二十年間だ。たいしたものだと思うし、本当にありがたいと思う。しかし白杖の方が楽かなと思ってしまうときもある。同伴が拒否されたときだ。みなさんにはわかりませんが、入店拒否されたときの気持ち。頭に来るし、存在が否定された気持ちになるし、世界に見捨てられた気持ちになる。盲導犬の同伴拒否は障害者差別だ。差別という言葉は強すぎるのではないのかと思う方もいらっしゃるかもしれないが、人権



侵害そのものだと私は思う。だったら白杖の方がいいのではないかとおっしゃる方もいるだろう。しかし命にはパワーがあるのだ。一人ではない安心と勇氣。手を伸ばせばあたたかな毛皮の手触り。それだけで何度癒されたことか。犬たちがいてくれたおかげで私は今まで生きてこられた。しつけは欠かせないし、力で伝えないといけないこともある。しかし、人生をともしてもらっている感謝と敬意、愛で胸はいっぱいなのだ。誘導ロボにナビシステム。視覚障害者が単独歩行できる環境はどんどん整ってくるだろうし、トイレにフードにブラシ。お世話も毎日たいへんだ。しかし私はこれから

も大たちと離れられない。

そしてもう一つ私には頼りになる目がある。点字図書館だ。今は「オーテピア高知声と点字の図書館」と呼ばれている。講義で配布された資料、卒論のための資料、公務員試験勉強のためのテキストの点訳、音訳等、失明してからずっと私の切実で個人的なニーズに寄り添い続けてもらっている。顔の見えない「視覚障害者」のためではなく、「私」のためにやってもらっている思いが強い。点字図書館では直接的な人との交流もある。対面朗読だ。本、資料、雑誌、チラシ、電化製品のマニュアル、その他気になったもの等も持ち込んで、対面で読んでもらう。図や写真等、直接やり取りしないとわからない情報もあるので、とても助



かっているし、楽しい。また、二時間も一緒にいればわき道にそれることもある。久しぶりにお会いした人とは近況を報告しあうこともあるし、本の感想を言い合うこともある。詩吟が飛び出した日もあった。点字図書館では豊かな人間的な時間も流れているのだ。合声音声で読ませられる、Kindleのような電子書籍も増えてきた。OCRしてパソコンに読ませることもできる。しかし人間には敵わない。これからも点字図書館は私たち視覚障害者にとってかけがえない場であり続けるのだろうと思う。

そしてもう一つの私の大切な居場所が職場だ。身体障害者枠での点字採用試験を経て、高知県庁で働かせてもらっている。パソコン画面を読み上げるスクリーンリーダースフトと点字を使って、上司、同僚に助けてもらいながら仕事をしている。全盲の公務員は全国的に少ない。高知県庁でも私が第一号だと思う。どんな仕事をどうやるかの手探りでやってきた。ここでは書けないような失敗をして涙を流したことも何度もあった。し

ばしば見渡す限り何もない荒野のど真ん中にあるような気持ちになることもある。しかし、だからこそその密かな喜びもある。

起案という作業がある。公務員の仕事としては基本の基本。入庁初日から覚える仕事だ。私の場合はテープ起こしの仕事から始まった。試行錯誤で起案まで行きつづきの五年かかった。そのときは胸が熱くなったし、全盲の職員が高知県庁で初めて起案した文書なんだなと思うと密かにちよつとだけ誇らしい気持ちにもなったし、作成した書類をずっと持っていたいような気持ちにもなった。荒野と言っても途方に暮れているわけではない。信じられないくらい遅い進みではあるが、開拓をしているのだ。…と思うようにしている。

障害者雇用も文化のようなものだと思う。半世紀前にはSFだったに違いないパソコンやインターネット、スマホもいつの間にか当たり前のものになった。SFの世界のように思えたことも、当たり前の文化になってしまえばどうってことないのだ。火を絶やすことがなければ、障害があっても障害

のない人と同じように能力を発揮することはいつの間にか当たり前になっているに違いない。そんな障害者雇用の担い手になるのだと思いつながら毎日職場に向かっている。

視覚障害の困難さは「移動」、「コミュニケーション（読み書き含む）」、「雇用」と言われている。今回テーマにした「犬」、「点字図書館」、「仕事」と何となく符合する。それらが二十年間私の中心にあったということは困難さを克服することで精いっぱい二十年間だったということだろう。

もう少しだけ、人生楽しみたいなども思ったりもする。

さあ、次の十年、二十年、私の真ん中にあるのは何だろう。

よしおか くにひろ

一九七八年 高知県室戸市生まれ
二〇二年 高知県庁入庁

『SASUKE』に挑戦し続けて

森本 裕介

初めまして、TBSテレビ番組SASUKEに出場している森本裕介です。二〇二〇年に念願の二度目の完全制覇を成し遂げることができました(完全制覇…用意された難関アスレチックを一度も失敗することなく全てクリアすること、二十三年間で四人しか達成していない偉業)。そこに至るまでに経験したことをお話しし、読者の皆様に何か一つでもプラスになれば幸いです。

私は、七歳の時にSASUKEに出会いました。自宅のテレビで偶然SASUKEを見たのがきっかけです。私はSASUKEを見る前から、公園のアスレチックで

遊ぶのが大好きな少年でした。木に登ったり、壁を乗り越えたり、ぶら下がって進んだりといった動きを行い、自分がどこまでできるのかに挑戦することが好きでした。そんな私が、テレビで偶然SASUKEを見た時に、大人が真剣にアスレチックに挑んでいる姿を見て感動し、「SASUKEに出たい!」と思ったのが最初のきっかけです。

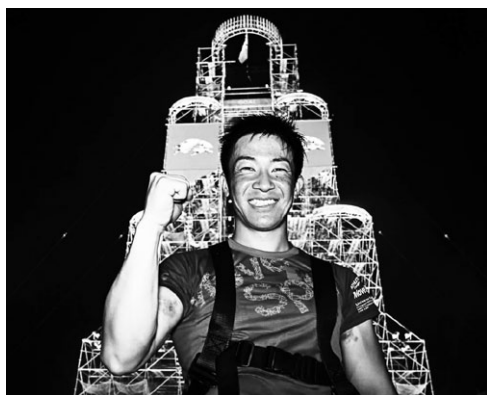
SASUKE初出場は十五歳の時でした。私が最も尊敬するSASUKE選手である長野誠さんの完全制覇を見て、SASUKE出場を強く決意したのがきっかけでした。私はSASUKEの出場方

法を調べ、応募ビデオやアピール文を作成して、SASUKEの制作会社に送りました。SASUKEの出場は非常に難関で、倍率が五十倍〜百倍にもなります。私は幸運なことに、一発で選考に合格することができ、念願の初出場を叶えることができました。そこからはSASUKE完全制覇の夢に向かって突き進む日々が続きました。

大学生になってもSASUKEへの挑戦を続けていました。高知大学に進学した私は、クライミング部に所属しながら、夢の完全制覇に向けて日々トレーニングをしていました。学業や研究との両立

が必要でしたが、頭を使うのと身体を使うのをうまく使い分けて、両方にとって気分転換になるように意識していました。そして二〇一五年ついに念願の完全制覇を成し遂げることができました。その後は表彰されたり、祝賀会を開いていただいたり、スーパードルフィンに招待していただきました。どれも私にとって最高の思い出です。高知県の皆様、ありがとうございます。

高知大学大学院を卒業後は大阪のメーカーIDECに就職しまし



た。大学院で学んだ情報科学（コンピュータ系の学問）を活かし、モノづくりの仕事がしたいと思っただけです。大阪に就職してから、もSASUKEへの挑戦は続けました。しかし、まず必要だったのが練習場です。SASUKEはアスレチックをクリアしていく競技なので、そのアスレチックのセッティングがないと練習することができません。今までは、高知の実家に練習用のアスレチックセットを自作して練習に励んでいましたが、大阪ではマンションで暮らしていたので、セットを作るのは厳しかったです。ある日、大阪でSASUKEを目指して練習されていた方に「ウチに来て一緒に練習しませんか？」と声をかけていただき、その人の練習場に通わせていただくことになりました。その方は大工さんで、事務所の空きスペースにハイクオリティなSASUKE練習セットをたくさん作っている方でした。なので、SASUKEの本番に近い実践練習をすることができ、非常に助かりました。

会社の後押しも大きかったです。



私が勤務する会社IDECは社長をはじめ社員の皆様がいつも私のSASUKE挑戦を応援してくれました。私が競技のために遠征に行くときには喜んで年休を取得させてくれますし、好成績を出せたときは社内で表彰もしていただきました。今も私のSASUKEへの活動を応援していただいているので大変感謝しています。仕事をしながらSASUKEの練習をするのは時間的にも体力的にも大変でしたが、SASUKEが好きなので、むしろ仕事の後の良いリフレッシュとなっていました。

そして、良きトレーナーの方ともお会いしました。今まで自己流でSASUKEに長年挑戦してきましたが、自己流では伸び代に限界があり、能力も頭打ちになってきていると感じていました。そこでプロのトレーナーの方に助言をいただくことで、自分が今まで気づかなかった弱点を知って克服したり、新しいトレーニングを取り入れてみたりすることでさらに進化することができました。

その結果二〇二〇年の年末に二回に二度目の完全制覇を成し遂げることができました。二〇一八年に大晦日の生放送のSASUKEでギリギリで完全制覇を逃し、それがずっと心残りでしたので、この二度目の完全制覇は本当に嬉しかったです。

そして今はSASUKE史上誰も成し遂げていない三度目の完全制覇を目指して日々トレーニングを続けています。三度目の完全制覇を目指すにあたっては、これまでと同じやり方ではなく、新しいトレーニング方法をどんどん試していこうと思っています。もう二

十年以上SASUKEをしているので、ある程度自分の勝ちパターンのようなものができてきているのですが、それを毎回なぞっているだけでは大きな成長はないと思います。色んな人からアドバイスをいただき、新しい方法も取り入れながらさらに進化していきたいと思っています。自分の人生の最高の楽しみとして、これからもSASUKEへの挑戦を続けていきたいと思っています。高知県の皆様、これからも応援よろしくお願ひいたします。

もりもと ゆうすけ

一九九一年高知県生まれ（二十九歳）

高知大学大学院修了

現在、大阪のIDEC株式会社
に勤務

和太鼓と私

日ノ Hayato

和太鼓は、数ある楽器の中でも、音に想いを乗せることが出来る楽器だと、私は思う。『ドン』という一音。その一音は世界の共通言語であり、人類の共通言語でもある。そして、世界に対して日本を示すことが出来る音である。表面に張られているのは牛の皮で、胴は木をくり抜いて作られている。大切な生命から成る和太鼓。自ずと畏敬の念が芽生えてくる。自分の生命を懸けて、全身全霊で打ち込むことで共鳴していく。口下手だった私に、和太鼓は表現する喜

びを教えてくれた。また、多くの仲間をくれた。それは、一生の宝物である。

私と和太鼓の出会いは、中学生の時に観劇した高校生の舞台。お客様のために尽くそうという気持ちで、一心不乱に打ち込むその姿は、とてもキラキラしていた。私は、その高校に進学することを決めた。いつの間にか勉強よりも熱中し、夢中で和太鼓に打ち込んでいる自分がいた。そして、一度太鼓と本気で向き合いたい、とプロの道へ進むことを決めた。

研修所には携帯電話さえ持ち込まず、ひたすらに自分と太鼓と向き合う日々。本気で泣いて、笑って怒って。時間を共に過ごした、最高の戦友たち。汗と涙の記憶が今でも色濃く残る。決して平坦な道のりでは無かったけれど、それは確実に自分の血肉となった。時は流れ、研修所での日々を終えた私。その後は舞台メンバーとして、稽古と舞台でのパフォーマンスの日々が訪れる。舞台の厳しさ、お客様の前で表現できる喜び。そして、舞台上でのパフォー

マンスを通し、『生きてる』ということを味わった。打ち込むことで芽生えるその充実感、他の何にも代えがたいものだった。

世界中を回った。日本中を回った。学校中を回った。沢山の方々に出会った。その出会いは全て、自分の財産である。

そして、型を学ぶ段階から、それを破り自分自身を探す旅へ。『組織』の中の自分から、『個人』としての自分へとシフト、私はソリストになった。本当の意味で人生と向き合ったのは、それからのこと。人生最大の喜び、そして悲しみが訪れる。目紛しい日々。その一歩が全て、自分の責任だということを実感した。善悪は全て自分で判断するしかない。誰に何を言われようと、自分を貫く『自分軸』が身についていった。自身にとっ

て、楽しいこと、好きなこと、大切にしたいこと。それを大切に、表現して生きていくこと。それが、自ずと自分の音になるから。私が道を見失いかける時、いつもその音は助けてくれる。

和太鼓と私。

それは、何があっても切れない縁で結ばれている。

これからも永遠に共に。その一打に全てを懸けて――。



ひのはやと

Sound Artist / 音楽芸術家

一九九五年 茨城県取手市生まれ。現在、高知県在住。和太鼓を中心に打楽器での演奏活動を行う。また、感性を育むことを目的とした独自のワークショップや、楽曲制作にも力を入れる。音楽というジャンルの枠を超え、国内外で精力的に活動中。
標語…『一所懸命』生命を燃やし、使い切る。

「アンテナ」 NHKのど自慢への挑戦

下尾 仁



周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がろう。

素人参加番組にはまっていた十五年程前、高知でNHKのど自慢があると聞き、この文化高知No.208でも紹介させてもらった川村慎二さんとのコンビで申し込みをしてみた。

のど自慢は映画にもなったこともあるぐらい国民的人気番組で、出場するのはすごく難しいと聞いていた。

まず書類で二百組まで絞られ、書類選考に通れば、本番前日に予選が行われる。選ばれた二百組が生バンドの演奏にて曲名の、あいいうえお順で三十秒程歌っていく。歌の上手い人や面白い人、同じ曲で申し込んでいると五〜六人が続

けざまに同じ歌を歌ったりするのでなかなかシニールであり予選も見応えがあった。僕たちはキャラバンバンでも披露した近藤真彦さんの「ハイティーン・ブギ」をつつぱりメイクと衣装で全力熱唱した。二百組の歌が全て終わり、本番に出場できるのは二十組。参加者たちにとっては、静まりかえった会場の客席で発表を待つ、一組ずつ合格者が名前を呼ばれていくドキドキの瞬間である。

その時、「ハイティーン・ブギ」を歌われました下尾さん川村さんと名前が呼ばれた。なんとなんと合格であった。

が、しかし川村さんが次の日、舞台本番。まさか合格すると思っでなく予選だけでも…との参加であったので、名前を呼ばれた僕は「すいません。明日出場できません」

ん」と言うや否や会場は「えっもつたいない」とザワついた。確かに憧れののど自慢。合格したのに出れないのは悲しすぎる。しかし次の年、「四国地上デジタル放送開始記念のど自慢」というやつが四国であると聞き、懲りずに、またまたコンビで申し込んでみた。

これは四国四県から六組ずつ計二十四組が選ばれ、愛媛県県民文化会館で歌うという、いつもと違ったのど自慢であった。僕たちは、数多くの予選参加者の中から、なんと合格。高知代表に選ばれ、憧れののど自慢に出場することになった。本番のことは緊張のあまりはつきりとは覚えていないが二千



人もの人の前で歌ったのは後にも先にもない。夢のような二分あまりは鐘、カン、カンと二つ鳴り終了。貴重な体験ができた。それから月日は経ち、いの町の喫茶店を訪れた時、おしゃべりなマスターが色々話しかけてきた。

話を聞いていると、マスターも、のど自慢に出場したことがあるらしく、よくよく話を聞いてみると、合格していた二人組が「出場できません」と辞退したので、次点で選ばれ出場したとのこと、その時「出場できません」と言ったのは僕ですよと伝えると「えっほんまに」と話は盛り上がり、感謝された。

それから数年が経ち南国市でのど自慢が開催されることに。またまた僕たちは申し込み、予戦に参加。みごとに落選であった。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

3月の事業から

桂九雀・桂文我落語会



三月七日(日)に、高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、「桂九雀・桂文我落語会」を開催しました。前半は、桂九雀師匠の弟子・桂九ノ一さんと桂文我師匠による落語会、後半は、この落語会の関連企画として二月二十日(土)に行った桂九雀師匠による落語ワークショップの参加者四名による落語発表会と桂九雀師匠による落語会という盛りだくさんな内容でした。ワークショップ参加者の披露した噺は、既存の噺を九雀

師匠が五分くらいずつにまとめたもので、全てお囃子や鳴り物が入っているもの。ワークショップ当日や前日に行った稽古では、他の方の稽古中も、皆さん勉強に々と参加者はメモを取りながら見学していました。お囃子や鳴り物の演奏は、客席からは見えない作りになっていましたが、トッパッターの桂九ノ一さんが高座に上がるときは、九雀師匠が太鼓を叩き、文我師匠が笛を吹き、姉弟子の岡野鏡さんが三味線を演奏していて、とてもあたたかい空間ができていました。

桂枝雀師匠のもとで修行してきた同期入門の桂文我師匠と桂九雀師匠。お二人の落語はさすが師匠！と感心しきりで、ご挨拶のときから観客を引き付け、少し集中が途切れてしまったように感じられた小学生たちも、のめり込んで楽しんでいました。

上方では、若手からベテラ



ンまで色々な層の落語家で番組(プログラム)を組むことが多いのだそうです。同期入門のお二人による落語会が行われたのは、およそ三十年ぶりとのこと、地方ならではの落語会を開催することができました。

昨年九月の事業再開から、チケットは完売したものの、十席前後の空席ができてしまったという、コロナ禍の影響を感じざるを得ない事業が続いていました。けれども当日の空席は三席と、ほんの少しだけ日常が戻り始めたようでした。

〈入場者数 六十七名〉

Culちゃーず

高知市文化振興事業団サポーターズクラブ

高知市文化振興事業団は、市民の皆様へ芸術・文化等により親しみを持っていただき、皆様とともに高知の文化を盛り上げるためサポーターズクラブ「Culちゃーず」を設立しています。

- 特典1 主催事業の招待(年間2枚まで)
- 特典2 主催事業チケットの1割引販売(1公演1枚まで)
- 特典3 横山隆一記念まんが館企画展招待(年間2枚まで)
- 特典4 「文化高知」の送付(年間4回)

会費
有効期間

3,000円/年
4月1日～翌年3月31日
※途中入会の場合、入会日から3月31日まで

お申し込み
お問い合わせ

公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071
email:kikaku@kfca.jp http://www.kfca.jp/kikaku/

高知市文化振興事業団

第三十七回 写真コンテスト・ 高知を撮る

令和三年三月十六日～二十一日、かるぽーと市民ギャラリーにて、「第三十七回写真コンテスト・高知を撮る」入選作品展を開催しました。

今回は、百三名の方から三百十七点の応募があり、審査の結果六十五点の入選作品を展示しました。

本コンテストは、過去から現在に至るまでの県内の出来事や風景、人々の暮らしを写真で記録し、高知の様々な表情を伝えることで、未来の高知について考えようという趣旨で開催しています。

記録写真部門・昭和以前の部では、足摺岬の灯台守の家族官舎や地元の子ども達を撮影した「昭和三十四年十二月三十一日「足摺岬」が特選を受賞しました。何気ない日常を写した写真が長い歳月を経て当時の様子を伝えていきます。

平成以降の部の特選では、土佐神社の屋根の経年劣化による、こけら板を葺き替える改修工事の見学会で撮影された「土佐神社こけら葺替」。日項目にする

ことはない伝統建築・技法の緻密さまで伝わってきます。

I LOVE 高知部門では、大豊町八畝の山里で何代も続いてきたと思われる神事の様子を撮影した「山峡の祝日」と、四万十市緑地公園の（森のピアノ）コロナ禍でマスクを着用してコーラスに取り組む人々を撮影した「コロナ禍コーラス事情」が特選を受賞しました。新しい生活様式で日常生活にも影響を受けている中、前向きさが感じられます。

令和三年年度の「写真コンテスト・高知を撮る」は休止いたします。再開の際には、写真を通して高知の過去と現在を繋ぐ、より多くの方に親しまれるコンテストとして長く続けていき、入選作品展にてたくさんの方にご覧いただきたいと思います。（入場者数 三百九十八名）



コロナ禍コーラス事情



土佐神社こけら葺替



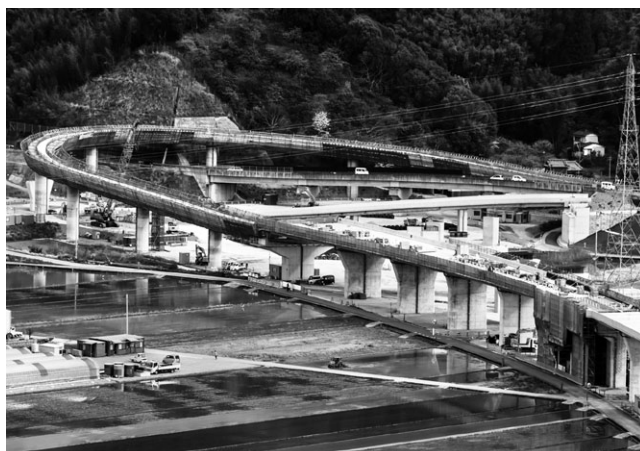
山峡の祝日



昭和34年12月31日～足摺岬

高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品



高知南国道路開通間近

太田 和子

(右上:平成31年4月5日 左下:令和2年9月2日
高知市五台山)

高知南国道路、高知南 IC あたりの工事中の様子と2/27の開通に向けて完成間近の様子を写しました。

トルストイの『戦争と平和』を二日で読了した。といっても、ジュニア版でだ。

『戦争と平和』は世界最高峰の文学と言われている。ナポレオン戦争を舞台にロシア人とは何か、人間とは何かという問題を、ぎりぎりまで追求した大長編だ。登場人物は実に五百五十人を超える。世界文学全集で三巻もある。

学生時代、何度か読みかけたが挫折した。あまりの長さや登場人物の多さに、読む気が萎えてしまった。その後、書店で見かけても手に取る気にならず、いつしか一生読まない本だと思い込んでいた。

ところが最近古本屋の児童書のコーナーでジュニア版『戦争と平和』（中村白葉訳・金の星社）を見つけた。

文字が大きく、わずか二百七十ページ。すでに絶版になった古びた本だったが、これなら読めそうな気がした。買って帰り、一気に二日で読み終えた。

感動的だった。文章が美しい。たとえば、主人公の一人であるアンドレイ公爵がポプラ林で馬車の窓から少女ナターシャを見かける場面。

「五月の空は青くはれたり、太陽は明るくかがやき、まわりの景色も

ジュニア版



風俗歳時記

実は、この『再生』こそ『戦争と平和』の裏テーマだと私は気づいた。主人公たちの再生。ロシア人の再生。人間の再生。――『戦争と平和』というタイトルは「死と再生」と読み換えられる。

中学生向けのジュニア版で一気に読み通したからこそ作品の全体像がはつきりとなり、自分なりの主題への迫り方ができた。今は、完全版『戦争と平和』を電子書籍で読んでいる。驚いたことに、内容がするすると頭に入ってくる。このまま行けば完読できそうだ。

ジュニア版はあなどれない。
(本の虫)

いきいきと見えるのに、なぜか彼はさびしさを感じたのだ。あの少女は、ほくという人間を知らないし、知りたいとも思っていないだろう。」
少女の生きている世界に自分の場所はないと感じてアンドレイ公爵は鋭い悲哀を感じる。それが恋の始まりだった。この描写は絶妙である。アンドレイは三十一歳にしてすでに人生に倦怠を感じている虚無的な人物だが、少女との出会いを通して『再生』してゆく。

夏の風物詩、高知市夏季大学の70回を記念して、
 今年は11日間開催します。
 新型コロナウイルス感染予防策として、
 全席指定とします。

第70回高知市 夏季大学

【日時】

2021年7月12日(月)～24日(土) ※18日・19日は休講

月～金曜日：18時30分～20時

土曜日：15時～16時30分

【会場】高知市文化プラザかるぽーと大ホール・小ホール

※詳細は5月下旬に高知市文化振興事業団のホームページ
 などでご確認ください。

風伯

「畑仕事を始めた」

で、七十五歳の後半になって、やっと念願の畑仕事ができるようになった。周りには私よりずっと若い人が野菜作りを始めている。都会から田舎へ移住してきて、これまでの物欲、消費生活を変えようとしているようだし、時代が少しずつ変化してきているように思える。

さて、まずは場所選びからだ、時

食糧難はすぐそこにあると思うし、食品メーカーは私たちに取って知らず知らずのうちに、遺伝子組み換え作物を使っているともいわれている。そんな時代だからこそ、食べるものは作れないわけではないのだから、なるべく自分で作ろうと思う。

そんなことから、去年ごろ、自分の時間が持てそうな気配になってきたの

間があれば住居から一時間ちょっとの範囲で土地探しを始めた。最初は、小さな民家が空いていてその前に畑があり、水は山の湧き水が利用できる、近くは自然林が広がっている、そんな場所を理想として探した。いろいろ妥協しながら、いまの場所を見つけた。

理想からは少しはずれているが、許せる範囲の土地だった。しかもしばらく休耕地だった場所をすぐ借りることができた。畑仕事を始めて、三カ月目に入る。樫を刈り畝を作り、種を蒔き苗を植える。作業小屋も育苗ハウスも作らないといけないし、やることはいっぱいある。

ただ土の上で土に触れ、風が渡り、鳥のさえずりが聞こえてくる。実に健康的で開放的である。やろつとしてい

るのはちょっといいかげんな自然農。これからどんな風になるか。楽しくて仕方がない。

(霖)



Book Club
 また、あなたと
 ブッククラブで

© 2018 BOOKCLUB FOR CATS, LLC. ALL RIGHTS RESERVED.

第194回 市民映画会

高知市文化プラザ
 かるぽーと大ホール

6月18日(金)
 19日(土)

上映時間

また、あなたとブッククラブで

①10:45 ②15:05 ③19:15

タレントタイム 優しい歌

①12:50 ②17:05

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。
 一般：前売券 1,300 円、当日券 1,500 円
 割引：1,000 円(前売・当日とも)
 ※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引
 【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

タレントタイム 優しい歌



今号の表紙

「鯉昇る」

吉良 遥菜

5月ということで鯉のぼりをメインに考えました。吹き流し(赤、黄色、緑、青の布)の部分は、本来は滝の水しぶきを表しているものですが、今回は今の世界の現状を意味して描きました。吹き流しの右からの強い流れに対して、メインの鯉のぼり(真鯉、緋鯉、子鯉たち)は上に上に登っていく様を描き、コロナ禍という激流にも抗い、助け合い乗り越えていく、成長していく世界を願ってこのデザインにしました。

(きら はるな/
 国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



第73回

高知市展

アンデパンダン

2021.5.29^土～6.13^日

午前9時～午後6時〈月曜休館〉 初日:午前10時開場/最終日:午後4時終了

会場: 高知市文化プラザかるぽーと 7階市民ギャラリー

◆絵画〈洋画〉◆日本画◆書道◆先端美術〈立体〉◆彫刻◆陶芸
◆工芸◆写真◆ペン字◆デザイン◆北見市美術交流作品

入場料 ▶ 前売300円/当日400円
療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者と
その介護者1名、及び長寿手帳所持者と高校生以下は無料
前売券販売所 ▶ かるぽーとミュージアムショップ 088-883-5052
高新プレイガイド 088-825-4335 ほか

【作品搬入】
日 時 ▶ 5月23日〔日〕・24日〔月〕午前9時～午後5時
会 場 ▶ 高知市文化プラザかるぽーと
出品料 ▶ 1部門につき一般1,500円/学生1,000円

ご来場の皆様へお願い | 新型コロナウイルス感染予防策として、来場時はマスクの着用、入り口での手指の消毒、
非接触式体温計による検温、連絡先の提供等にご協力いただきますようお願いいたします。

お問い合わせ 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071
主催: 高知市展代表委員会/公益財団法人高知市文化振興事業団/高知市
共催: 高知新聞社/NHK 高知放送局/RKC 高知放送/KUTV テレビ高知/KSS さんさんテレビ

高知市文化プラザ
かるぽーと
デザイン ▶ 安井月乃